

■高校野球のケーススタディー（第46回）■



一般財団法人兵庫県高等学校野球連盟

高校野球における公式試合や練習試合の中で生じたプレイの中で、“こんなプレイ、ルールではどうなるの？”といった疑問について、ルールの側面から解説します。

○ 第108回選手権大会を振り返って

- ①ユニフォームが破れてしまった時の対応
- ②選手権大会の中で気になった過度なベンチ前での出迎え及びハイタッチ

この2つのテーマについて確認をしたいと思います。

① 試合中にユニフォームが破れてしまったら・・・

この選手権大会の中でも、ユニフォームが破れて交換を促したケースが2件ありました。

「ちょっとぐらい、服が破れていてもいいのでは？」と思う気持ちもあるかもしれませんが、**公認野球規則 3.03(e)**には、『各プレーヤーは、その袖がボロボロになったり、切れたり、裂けたりしたユニフォームおよびアンダーシャツを着てはならない』と記載されています。そのため、交換を促したことになります。

もしもユニフォームが破れてしまった場合は、予備のユニフォームへ着替えましょう。しかし、予備がないという場合も多いと思いますので、その場合は控え選手のユニフォームを借りましょう。

※登録の背番号と異なるため、必ず本部・相手チームとも情報共有を行います。その後、試合中に修復できれば、改めて本部・相手チームと情報共有した上で元のユニフォームへ戻します。

② 過度なベンチ前での出迎え及びハイタッチについて

選手権大会の中で、攻守交代時の過度な出迎え、得点時のベンチ前でのハイタッチが散見されました。審判委員から注意を受けたチームも多かったのではないのでしょうか。これについては、2年に1度各加盟校に配布される「**高校野球審判の手引き**」の〈大会運営上の留意事項 周知徹底事項 マナーの向上〉の欄、大会前に配布する「**規則・マナーに関する注意事項**」にも記載をしていました。

どうして注意をされたのか…。高校野球は教育の一環です。「**日本学生野球憲章**」の前文に「学生たることの自覚を基礎とし、学生たることを忘れてはわれらの学生野球は成り立ち得ない。勤勉と規律とはつねにわれらと共にあり、怠惰と放縦とに対しては不断に警戒されなければならない。元来野球はスポーツとしてそれ自身意味と価値とを持つてあろう。しかし、学生野球としてはそれに止まらず試合を通じてフェアの精神を体得する事、幸運にも驕らず悲運にも屈せぬ明朗強靱な情意を涵養する事、いかなる艱難をも凌ぎうる強靱な身体を鍛練する事、これこそ実にわれらの野球を導く理念でなければならない」と記載されています。

試合中に手ごたえを感じて「やった！」と喜びの表現につながるのは自然なことでしょう。ただ、何回も繰り返したり、過度に行うことは「意識的」な行為だと思います。相手がいることで試合ができます。「意識的」な行為はやめ、相手に対して敬意・感謝の気持ちをもってプレイをしましょう。

また、攻守交代の際には選手各々に役割があります。ケーススタディーの第29回にも掲載している内容を一部抜粋します。

「投手は打者を待たせない、打者は投手を待たせない」という気持ちでゲームを進めるためには、先頭打者、次打者およびベースコーチはミーティングに参加せず、速やかに所定の位置につくことが求められます。このため、控え選手が攻守交代の際、捕手や打者の準備をサポートすることは、テンポのあるゲームを行う上でとても大切な行動です。ハイタッチで選手を出迎えるのではなく、攻撃から守備、守備から攻撃に移る際、選手各々がやるべき役割をぜひこの機会に確認しておいて下さい。

マナー面においても優れたチームが増え続けることを願っています。

表題デザイン協力：兵庫県立姫路工業高等学校デザイン科
表題デザイン：谷口 真奈佳さん（74回生）